

学天則とはどんなロボットか？

日本で最初のロボット

学天則は日本で最初のロボットとされています。手が静かに動き、表情がゆるやかに変るといった動作は、昔からのからくり人形の奇抜な動きに負けるかも知れませんが、その機能は現代のロボットに比ぶべくもありません。でも、日本初のロボットとして多くの人に賞賛されているのはなぜでしょうか？



カレル・チャペック
(1890-1938)

それは、「ロボット」という概念を西村真琴がしっかり理解し、ヨーロッパで生まれたロボットという概念を越えたロボットを作ろうとしたからなのです。

では、そもそもロボットとはどのようなものとして構想されたのでしょうか？

ロボットの生みの親はチェコの小説家カレル・チャペック(1890-1938)で、戯曲「R.U.R.」(エル・ウー・エル、1920年)の中で、人間のために労働を肩代わりしてくれる人造人間を構想し、これにロボタ Robota、つまり、賦役や労働という意味のこぼをつけました。現在では考え及ばないほど厳しい労働が課せられていた当時の労働者層に夢と希望を与える存在として歴史に登場したのでした。同時期、アメリカではテレボックスという電話をかけてくれたりする人造人間が提案され、イギリスではロボットという人造人間が構想されていました。

西村真琴は1928年(昭和3年)11月のサンデー毎日誌上に「人造人間-ガクテンソクの生れるまで」と題する文を寄稿しています。そこに「日本で初めて生れた人造人間」と題する章を設け、生物学者である自分が学天則を構想した経過を記しています。物質の構造が明らかになってきた時代背景に基づき、「人工的に生物の体内に起こる化学作用を、分量的にも、温度の上からも、同様な状態を実験室内で真似得るを認め出したことから或いは生きた物質の人工製作に成功するのではあるまいか」とし、「生物の発生や進化にならへー簡単から複雑へー」のモットーの下、その初期実験として学天則を作ったことを記しています。

西村の人造人間はチャペックに影響を受けたとはいえ、ロボタともテレボックスともロボットとも違った、人間の素晴らしさを示す機械として構想されたのでした。「神は人を造れり、人は人の働きに神を見出す、神を見出さざるを文明は呪はるべし」-これが学天則のモットーでした。



学天則、荒俣宏著「大東亜科学綺譚」
(1991年、筑摩書房)から

「記録台にたったガクテンソクの息づく胸に輝くコスモスの花章は、宇宙、世界という意味を負へることにおいて彼の胸を飾るに相応しくあります。左手には靈感燈を握ってある。これが彼の額あたりで一度光明を点ずる時に、いはゆるインスピレーションが伝はると見るのです。右手の嚆矢のペンの働き出すのは、この時です。作者は凡そ人間の働きには常に創作がなくてはならないといふ理想から特に嚆矢のペンを選んだ次第であります。」

(西村真琴、サンデー毎日、1928年(昭和3年)11月)